
からから-くるくる ~春~

Wonder Forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からから - くるくる - 春 -

【NZード】

N5273Y

【作者名】

Wonder Forest

【あらすじ】

何時もどおりの日常にて、少しスペースが入ったお話の4部です。

夕暮れの教室に、ピアノの音色が鳴り響く。

その音色は、驚くほど綺麗なのに。

そう、例えるなら、何気ない空を描いた絵なのに。

空だと分かるのに、青が足りないかのように。

朝焼けの眩い赤でも、夕暮れの切なくなる赤でもない。

青が足りないと分かっているのに、青色が完全に抜け落ちていた。

僕は、彼女がこんなに綺麗な音色なのに、なぜ色が足りていないのか不思議で見つめていた。

見つめていた僕に、演奏を終えた彼女は、訊ねる。

「どうだつた？私の演奏。」

僕は、素直に答える。

「とても綺麗な音だつた。綺麗な白黒の音。」

「白黒のは、鍵盤の事なの？」

「そうじやない。」

「色だよ。色が、ない。」

「音に、色は無いわ。」

「もつともです。」

「んー。心?が無い。」

「?ピアノに、心は関係ないわ。」

確かに楽譜上では、関係ないけどね。」

「僕は、ピアノは弾けないけど、何かが足りてないのは、分かるんだ。」

「心が、足りていないと言つのな?」

うん。

「貴方が（僕が）、埋めて（埋めて）ちょうどい（あげる）。」

この世界に、色が付けられる。」

チャイムが鳴り、少女は少年の元に。

「今日も、お弁当作りすぎたから、一緒に食べない?」

やつぱり、僕に毎日お弁当を作ってくれる。

「何時も、ありがとね、ちいちゃん」

「べ、別にわたぬきの為に作ったんじゃないんだからね」

無理矢理ツンデレになってしまった。

「無理しないで・・・いいんだよ?」

「・・・」

視線を逸らされた。

まあ、こういう意味の分からぬ属性付加はよくあることなので気にしないでお弁当を頂く。

「うん、ちいちゃんが作る」飯は何時も美味しいね。」

「毎日・・・お味噌汁作るわ、私」

お嫁さんの座を、狙つているらしい。

「ちよっと、気が早いんじゃないかな」

「貴方の為なら、私、白みそ派から赤みそ派になるわ。」

人の話を聞いてないと!? 話を強引に変えるしか・・・! 」

「わあ、このタ「せんワインナー美味しいなあ、この卵焼きも美味しいのかなあ？」

じゃりつ

「！？」

「やだ、私ったらお砂糖の量間違えちゃった」

分量もそうだけど、砂糖だと・・・？

「てへつ

「そんな養殖された天然、僕は認めない！？」

また視線を逸らした。

だから、なんでもうやつて属性入れようとするんだろう。

「ちいちゃんは、ちいちゃんのままが一番可愛によ～」

「・・・貴方のやつこいつは本當に、卑怯よ。」

少女は、静かに俯いて、囁いた。

「ああ、帰りましょつ」

少女は、当然のよつて元気。だから僕も、当然のよつて返す。

「うん、 だけどなんで自転車無いの？」

少女は言つ。

「だつて、 青春は一人乗りで下校でしょ」

「だから学校に自転車置いてこくの？」

「朝、 貴方に迎えに来てもうべるじゃない。」

生徒指導の先生が黙つていない。せえ。

「わ、 行きましょ。」

少女はもう、 後ろに座つて待機してくる。

僕はサドルに跨り、 後ろのお姫様に尋ねる。

「どこまで行かれます？お姫様」

「ヴァージンロードまで、 ちょっと」

「そんな気軽にきたくな」よー。」

この世界は進む。 ゆくへつと。

前編（後書き）

いつも、いよいよ最後の部となりました、わんだーふあれすとです。
まあ、つながりほとんど無いんですけどね（笑）
最後までぜひお楽しみ頂ければと、思います。
次予定：11/27

僕は橙色の空の下、自転車を漕ぐ。君を乗せて。

あまりにも夕日が情緒を搔き立てるから。

わざわざ遠回りして、河川敷にまで来てシチュエーションも整えた。

だから、今こそ僕は言おう。

「ねえ。僕が未来から来たって言つたら信じる?」

「ええ。私たちの子どもの名前を教えてくれるな?」

「なんだって!?」

「聞いてないよ!?.未来の自分!?.

「私たちの間には何人子どもがいるのかしら、パパ。」

「パパとは呼ばせない!..すいませんでした!..」

彼女は、お腹をさすりながら、言い返す。

「いいのよ別に。慌てずとも未来は、決まっているのだから。」

「あ、そこの公園に寄つていこう。」

僕は、話を強引に逸らす。

「ええ。わたぬきと一緒になら、何処でもいいわ。」

ちょっとした恐怖を感じながら、僕は公園を指す。

公園で、僕と彼女は歳に似合わず、ブランコに乗り、語る。今朝の担任の寝癖がどうとか。隣の席の女の子がどうとか。周りにくだらないって言われてもおかしくない話。

だけど、一人には大事な時間。楽しい時を刻んで、

やがて、赤く熱い陽は沈み、白く甘い月が一人を照らす。

彼女は、ふっとブランコから降りて一周くるりと回つて言を伝える。

「月が、綺麗ですね。」

月に照らされた少女は、雪を連想させて油断すれば消えてしまいそうで、

だから、僕はただただ肯定しかできなくて、

それを見た彼女はくすりと笑つて、

「貴方を愛してるって、言つたのよ。」

僕は、それに何て答えるべきか分からなくて言葉を探すけれど、見つからない。

思いつままに僕は答える。

「僕と、結婚したいの？」

彼女は嬉しそうで、少し悲しそうで、

「それはまだ後回し。まずは私と、付き合つてください。」

彼女が悲しそうな顔をするところに、僕は彼女の側に居てもいいのだろうか。

「僕は、ちいちゃんと一緒に居たい。ちいちゃんの横に元でもいいのかな。」

「貴方さえ、よければ。」

「僕で、よければ、喜んで。」

彼女を悲しませたとしても、僕は、君の隣に居たい。

月に照らされた下、君を抱きしめて、初めて沸いた感情はない。

僕には醜くも美しいモノに思えたが、これを僕にはまだ言葉に出来ない。

世界が、僕に甘く冷たく祝福をくれる。

少し、文学というかポエムっぽいイメージを『えたいのですが、非

常に難しいですね・・・。

次予定：11/30

昨夜の一件を経て、僕らはよしやく付き合ひついととなつた。

今までだつてずっと一緒にいたし、特別、変わつたことはない。

・・・ないと、思つていた。

「何がどうしてこうなるー?」

僕はつっこむしか無かつた。

「今日はちよつと、作りすぎたから、たくさん食べて

僕の前には五重の弁当が広げられていた。

「ちよつと、作りすぎたとかそういうレギュルじゃないよねこれ。

「だつて、よしやく私たち一つになれたんだなあつて・・・。」

お腹をさすりながら、ちいちゃんは言つ。

「ー? 昨日、僕らそこまで大人になつてないよー?」

思わず呟く僕の悲鳴に、ちいちゃんは悪意のある屈託のない笑顔で答える。

「大丈夫、私への愛があれば食べられるわ。」

愛が、試されている！？

「やつてやるあああああーー！」

「きやー、わたぬきかつこいいーー！」

棒読みの台詞を、糧に食べる、食べる…

僕が半分皿を覚ますと、病院の匂い（なんとかナトリウムとか科学の先生が言つてたけど、忘れた）がする部屋でベッドに横になつた。

すぐにお弁当一いつ皿の途中で食べ過ぎで、保健室に行つて寝ていたことを思い出した。

だから、僕は分かつついていても、弦くしかなかつた。

「知らない、天井だ・・・。」

見
知
ら
ぬ、天井

「遊び過ぎよ。」

「あ、はい。」

隣に、ちいちゃんがいた。

「10分ぐらいしか寝てなかつたと思つただけど、ずっと醒してくれたのだろうか。」

「「めんね、食べ切れなくつて。」

僕らの愛は3分の2ぐらいまですか、まだ無いのだろうか。

「うやつやこいこい！」

「うやつやこいこい！」

一番遊んでるのはちいちゃんじゃないですかあああ

「あれだけ食べてってくれて嬉しかったのは、ホント。だけど、それで倒れられたら、意味が無いわ。」

「心配、かけて「めんね。だけど、作り過ぎだよ。」

「ふふ、私も「めんなさいね。」

僕らの間に爽やかな風が吹く。僕も釣られて微笑もつとして、

「帰れ、お前、ひ。」

保険医が、僕らの時間を呆氣なく終わらせた。

僕らが付き合って一ヶ月くらいが経つて、今日もちいちゃんのピアノを聴く。

夕暮れの赤が、切ないほどの赤、オレンジ、少しの赤紫が、教室を照らして、影を浮かす。

影もまた、光を侵食するほど隴げで、毎日のように見ていく風景なのに、どこか幻想的で、こういうのが、逢魔が時、とか言うのかなあとか。ちょっと知識人ぶつてみたりする。

「今日も、何時も練習してゐるのを聴かせてくれるの？」

「ええ。ただ、今日は貴方が言つ色を付けて見せるわ。」

そう、僕は付き合つてからも聞いているけど、やつぱりどいかモノクロな音にしか聞こえない。

何時もちいちゃんはそれに「ごめんなさいね。」しか言わなくて、僕が何故か申し訳なくて。

ちいちゃんは言つ。

「だから、目を閉じて。」

耳に集中して聞いても、きっとこの色は変わらないと思つたけれど、僕は言われたとおり目を閉じる。

田を開じて3秒後、唇に感触。

慌てて、田を開けるとセリム、夕陽を眺めにしたむすりちゃんがいて。

その姿は影でほとんど見えないので、やはり、光を侵食するのかのようにそこに居る安心感を、僕に与えてくれて、

だから、僕は思わず言ってしまう。

「今この気持ちを愛と呼ばないで、なんと言えばいいか分からな
いよ、ちちちゃん。」

少女はそれに嬉しさを隠し切れず、

「わうっ、好きだよ、千春。だから、何時もの曲を聴かせてくれる

」「い、めん、好きだよ、千春。だから、何時もの曲を聴かせてくれる
わたぬき。」

?

「よつやく、私の気持ちが貴方に響いたんだね……。」

青の旋律が流れ出す。

僕は確かに、感じた、僕の心に青が染み込んでくるのを。

彼女が白黒なのではなく、僕に青が足りなかつたのか。それは分からぬ。

だけど、確かに、僕が君の隣で見ることの世界に青が色付いた。

夕暮れの赤が、影に負け、黒に染めていく中、今日の青の旋律は、響く事を中々止めなかつた。

後編（後書き）

どうも、わんだーふあれすとです。

これにて、4組の恋愛は終わりとなります。

この次は、ファンタジー系の中編小説を予定しています。

ぜひまたお会いしましょう。

次予定：12／3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5273y/>

からから-くるくる～春～

2011年11月30日12時49分発行